

外国人留学生の「日本事情」授業の効果検証

Evaluation of the Merits of the “Japan Studies” Course for International Students

鈴木 瑞

1. はじめに

日本では近年外国人留学生数（以下、留学生）が年々増加傾向にあり¹、日本の大学及び短期大学に入学した留学生の日本語教育を含め、日本の文化、社会など多方面の教育の充実がますます重要になっている。現在、日本の大学や短期大学などの高等教育機関では、留学生に特化する日本語教育の科目が設けられている大学が数多くある²一方、「日本事情」という科目についてはまだ充実しているとは言えない状況である。したがって多様な学習プランの構築や学習成果の向上のための方策を今後も議論する必要があると考えられる。本稿は「日本事情」の授業の効果について考察し、効果的な教授法の模索に一助することを目的とする。まず先行研究を概観し、次にアンケートの集計結果の分析を行う。分析結果を基に留学生の「日本事情」授業の効果を検証する。

2. 先行研究

これまで日本の高等教育機関において、「日本事情」に関する授業について様々な観点から研究が進められてきた。『日本事情ハンドブック』（1995）によると、「日本事情」という学科目は昭和30年代に留学生受け入れの体制が作られはじめた動きの中で、日本での生活に役立つものを与えるという趣旨で設定されたものである。すなわち日本語能力とは別に、留学生にとって必要な専門の領域の知識や技能をまとめたものである。その範疇は多岐にわたり日常生活一般をはじめとして、あらゆる学問分野に関わる学際的な領域として、多様性を持っている。しかし、その目的や、教育内容について明記されたものはなく、大学や担当教員に内容の選択を任せた形になっている。また、前述したように、『日本事情ハンドブック』では「日本語の習得に際しても言語的な要素だけでなく、日本人の行動の様式や習慣あるいは価値観といったものを効果的に教授することが不可欠である。」³と述べられている。つまり「日本事情」の学習者にとって必要なのは、「主体的に日本の文化・社会に参加し、主張もできる能力を身につけることであって、そのためには、教室の規模や形態へ配慮することから始まり、学習者の求めているものを積極的に引き出し、知的興味をかきたてることのできる教室活動や教材の準備が重要となる。」⁴ということである。

戸田（1992）は、大学正規科目としての「日本事情」について、日本語教育の科目の一つとして位置付けることができ、留学生に日本に関する事情を教授することは異文化の一つとして把握直されなければならないと主張し、異文化としての日本文化を対象化して教授・学習すべきである⁵と

述べている。

その他、「日本事情」授業に関して、教材についての研究は内藤（2014）、CLIL理論に基づいた「日本事情」の可能性については清水（2016）、日本事情科目指導の在り方は横山（2018）、異文化コミュニケーションや協働学習の観点からは吹原（2011）、足立ら（2018）などが挙げられる。また、外国人留学生の日本語教育に関する先行研究として、加納（2006）や久川（2013）などの例が挙げられる。

しかし、近年の留学生数の増加に対応出来るだけの先行研究が蓄積しているとは言えず、研究成果の拡大が求められる領域である。先行研究から見て分かるように、「日本事情」という科目に関して、歴史や位置付け、教材から指導の在り方、学習スタイルなどの側面を中心に研究が進められてきた。だが、留学生学習者において学力、性別（男女）などの諸要素の違いによって学習の効果への影響についての分析はまだ乏しいという状況である。実際、筆者が所属している静岡英和学院大学に在籍している留学生は、会話は生活に困らない程度であっても、大学での日本語による授業の理解や、レポート作成など、読み書きの日本語力が不足している。

このような状況の中、日本語力に個人差のある学習者の授業で、学習修得度の実態を把握することが今後の留学生の授業の参考材料になることが期待できる。更に、学習者の性別（男女）の違いによって学習修得度との関係性について解明することで、効果的に教授することの一助になることができると思われる。そこで本稿では、筆者が担当している静岡英和学院大学短期大学部の留学生の「日本事情」の学習者を対象に、2019年度前期授業でアンケートを実施し、日本語能力及び性別による学習効果の違いについて検証することとした。

3. 調査概要

静岡英和学院大学短期大学部では、近年の留学生の入学者数の増加によって、留学生の日本語教育強化の必要性が高まり、その取り組みの一つとして、2017年度前期より「日本事情」が選択科目として開講されている。筆者が担当する「日本事情」授業の目的と到達目標は次のようなものである。

日本事情・文化の知識を深めることによって、日本人の行動の様式、習慣、価値観などを知り、効果的な学習につなげる。日本の生活、文化や社会に関わる様々なことを学び、スムーズに学生生活を送り、日本社会に適応する能力を身につける。

授業は学習者の知的興味をかきたてるための教室活動や教材の準備を心掛け、学生生活に必要な知識から日本の伝統文化や現代時事ニュースまで多岐に渡って紹介した。学習者に広く学ばせることによって、語彙量を増やし、理解力が高まり、さらに様々な日本の文化に興味を持たせるきっかけになることを目標としている。

授業は内容によって、パワーポイントを使用する一般講義、グループ演習、体験型学習、時事学習といった形で様々なスタイルを取り入れて行っている。筆者は開講当時から授業を担当している

が、留学生を見ていると、学習内容の理解度、学習意欲、取り組み状況に開きがあることを感じた。その原因を究明するため、2019年度前期、学習者に授業アンケートを実施した。今回の調査では学生の日本語能力の高低、性別（男女）によって学習の効果に違いがあるかを明らかにしようと試み、それぞれのカテゴリーを2つのグループに分けて、比較、分析を行った。⁶

そのカテゴリー分けとは日本語能力について、学習者が持っている日本語に関する資格ごとにレベル分けするというものである。すなわち日本語能力試験⁷ N2級、日本語 NAT-TEST⁸ 2級以上の学習者を高いグループに、それ以下または資格を持っていない学習者を低いグループにした。

アンケート調査では、質問項目に対して4段階評価を以下の通り行った。

とてもそう思う・とても深まった＝4 そう思う・深まった＝3

まあまあそう思う・少し深まった＝2 あまりそう思わない・あまり深まっていない＝1

4と3は積極性があり、2と1は消極的な傾向があると分析することにした。

調査対象は静岡英和学院大学短期大学部2019年度前期「日本事情」授業の受講者で留学生29人である。そのうち、日本語力が高いグループ（以下、高いグループと表記）に分類された学習者は11名で、日本語力が低いグループ（以下、低いグループと表記）の学習者は18名になった。また、男子留学生は17名で、女子留学生は12名となった。受講者は中国、ベトナム、ミャンマー、スリランカ、ネパール、インドネシアというようにアジア諸国からの私費留学生である。

4. 一般講義とグループ演習、体験型授業の調査結果

4-1 「大学生活 日本での暮らしのルール」の学習の調査結果

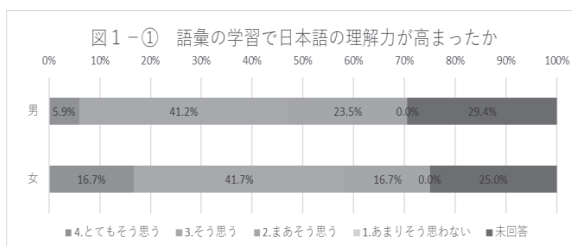
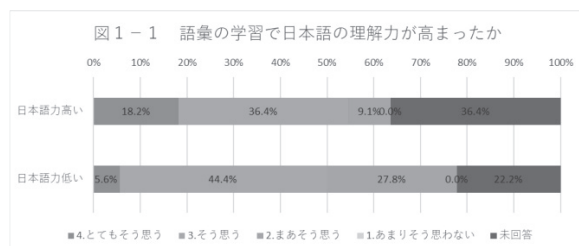
本学の短大部は2年制であり、「日本事情」授業は留学生対象で毎年前期のみで開講される。そのため、受講者のほとんどは1年の留学生である。新入生が早く新しい環境に慣れ、スムーズに留学生活を送るため、第1回目の「日本事情」授業には大学生活に必要な基礎知識などについての学習を行った。今までと学習環境が変わり、大学特有の専門用語も覚えなければならない。然しながら、それらは日本人学生すら分からないことが多く、ましてや日本語がままならぬ留学生にとっては大変な努力を必要とする。したがって語彙の意味から大学生活の流れまでの幅広い学習を通して、留学生活に役に立つよう授業を工夫した。その結果第1回目の授業アンケートでは次のような回答が見られた。

問の「大学生活 日本での暮らしのルール」の語彙の学習で、これらの日本語の理解力が高まったと思うか、という質問の回答は図1-1のようになった。

図1-1から見ていくと、日本語力の高いグループが4の割合は18.2%で、低いグループの5.6%より高い割合となった。一方で、2の割合は日本語力が低いグループは27.8%であり、高いグループの9.1%の3倍の割合にも達した。ここから日本語能力が高い学習者は語彙の理解力が高く、日本語能力の低い学習者は理解力が不足しているとも解釈できる。また、高いグループが積極的で低

いグループは消極的な傾向があるとも読み取れる。しかし、4と3を合わせて、両グループともに半分の学習者数に達しており、1がゼロであるという結果から見ると、語彙の学習で理解力が高まったと言っても良いだろう。

更に、同じ質問で男女別（図1-①）で分けて集計すると、4の割合は女子留学生が16.7%で、男子留学生の5.9%より高い結果となった。これは女子留学生のほうが男子より新しい学生生活にやや意識が高く、前向きな姿勢が理解力にプラスの働きがあったと思われる。

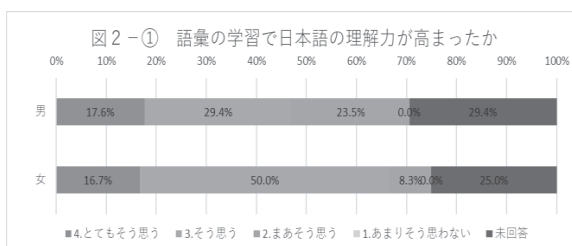
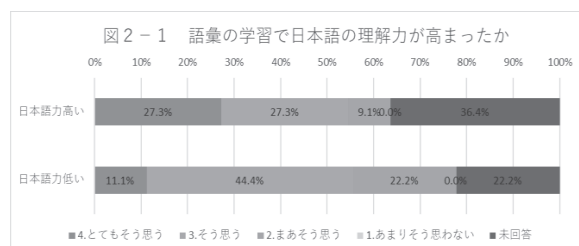


4-2 「留学生のために必要な知識」の学習の調査結果

第2回目の授業は日本で留学生生活を送るため、留学生にとって必要不可欠な法律的な知識や病気で入院する際、利用できる制度などについて一般講義と事例を使ったグループ演習を交え、学習を行った。アンケートは講義と演習の両方で質問項目を設け、調査を行った。集計の結果は次のようになった。

問の今回の授業に関する語彙の学習で日本語の理解力が高まったと思うか、という質問に、図2-1に示したように、日本語力が高い学習者は4の割合が27.3%であり低いグループ（11.1%）の2倍以上となった。日本語力が低い学習者の3の割合（44.4%）は高いグループ（27.3%）の1.5倍にも達した。4と3の合計で見ると両グループともにほぼ同じで半分以上の学習者からプラスの評価を得た。またそれ以外の学習者には、低いグループのほうが2の割合（22.2%）が高いグループ（9.1%）より2倍以上も高く、低いグループの学習者の理解力が不足していることが明らかになった。

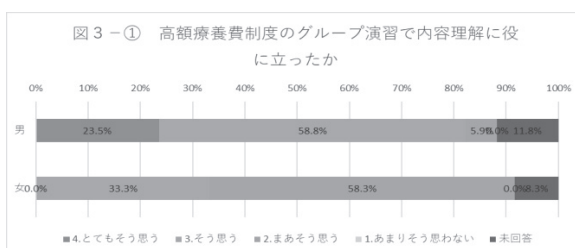
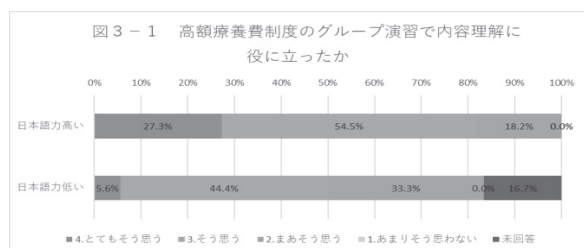
男女別の集計結果は図2-①のようとなった。4の割合はほぼ差が見られなかったものの、3の結果は女子が全体の半分を示したことにに対して男子は全体の約3分の1となった。また、2についても女子（8.3%）のほうが少ない、男子（23.5%）と比べて大差が見られた。これは前回の授業と同じでやはり女子のほうが男子より留学生生活に意欲的に取り組み、理解力が高いことを示している。



グループ演習では座席の近い学習者でグループにして、1グループ5人程度で6グループに分け、学習内容を応用した事例解決策について考えてもらった。問の高額療養費制度のグループ演習で内容理解に役に立ったか、についての結果を見てみよう。

図3-1、3-①が示すように、日本語力が高いグループの4が27.3%で、低いグループ(5.6%)の約5倍の差があった。また、3は日本語力が高いグループ(54.5%)は低いグループ(44.4%)より1.2倍の差があった。4と3で合わせて見ると、日本語力が高いグループは8割となり、低いグループの5割と明らかな差が見られた。そして男女別から見ると、男子グループの4は23.5%であるのに対して、女子グループはゼロという結果になった。また、3においても男子(58.8%)は女子(33.3%)の1.7倍の差があった。4と3をトータルで見ると、男子は8割、女子は3割程度という大差が見られた。

これはグループ演習の学習において、日本語力が高い、または男子学習者のほうが学習内容の理解に有意義なものだと判断でき、日本語能力が低い、または女子学習者はそれほど感じられなかったということである。演習に使った事例は学習者が馴染みやすいように、学習者と同じ立場の本学短大留学生で、病気になり入院するという設定で、制度の利用について考えてもらった。グループでは、日本語力が高い学習者は演習の前の講義で学んだ知識を活かし、具体例の問題解決に積極的な発言が見られた。また、男子学習者は女子より活発で元気に課題に取り組む姿勢が見られた。最後にそれぞれのグループに意見を纏めてもらい、代表者を決めて発表してもらった。発表者の内訳は男子が5名で女子は1名であった。これらの結果から制度の応用力の高低は基礎知識が必要であり、日本語力が高い学習者は知識の吸収力も高く、応用することができることが明らかとなった。また、男子学習者はこの制度に女子より関心が高く興味があり、女子より前向きに取り組むことができるという結果となった。



4-3 「日本の地理」学習の調査結果

前述したように日本事情を多方面で学び、様々な分野の語彙力を身に付け、知識を深めるために地理学習も取り入れてみた。授業の中で学習者に日本の地理を勉強した事があるかという質問をしたら、全員がないという回答だった。日本で生活する留学生にとっては、よく使われている地名を知らず読み書きができないのは不便で、深く日本を理解するにも支障をきたすと考えられる。したがって地理学習の意義、必要性が大いにあると判断できる。

授業では、日本地理の概観から日本地図上の各都道府県の名称などについても説明した。地名が多いことで全部覚えるのは困難だと考えられることから、一般的によく使われるものを重点的に行っ

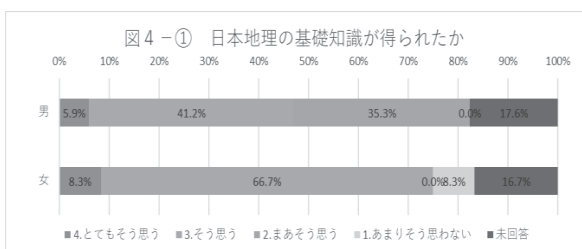
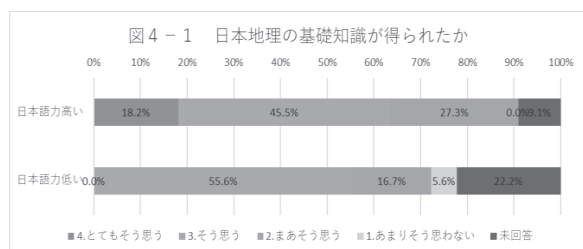
た。

地理学習で地理の基礎知識が得られたか、という質問に対して、図4-1のような結果となった。

日本語力が高いグループは4の割合が18.2%に対し、低いグループはゼロとなった。また、低いグループのほうで1の回答者（5.6%、1人）が現れた結果となった。しかし、3の回答者数は低い方が半分以上であり、低いグループにも一定の学習の効果が見られた。

ここで考えられる原因としては、地理では大多数の地名に漢字が使われていて、漢字文化圏でない国出身の、日本語力が低い留学生にとっては学習のハードルが高かったと推測できる。一方で、高いグループの6割以上の学習者からは、基礎知識を得たという肯定的な回答があった。つまり、両グループの学習者にとって初めての地理学習では、日本語力の差で学習の到達度にはっきりとした違いが見られることが分かった。

次は男女別に分けると、図4-①に示されるように、女子留学生学習者の4と3が7割以上を占め、基礎知識が得られたという前向きの回答だった。それに対して、男子留学生学習者の4と3の割合が4割強であり、明らかに差が見られた。また、男子グループの2の回答者数は35.3%であるのに対し、女子グループはゼロで、1の回答は8.3%（1人）であった。これは男子より女子学習者のほうが地理学習に積極的に取り組み、意識が高いと言っても良いだろう。

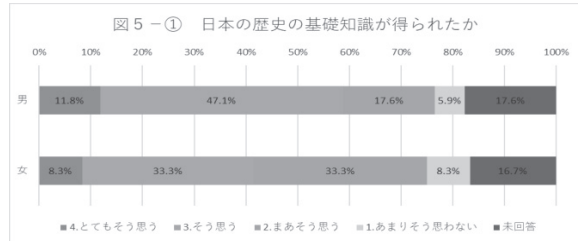
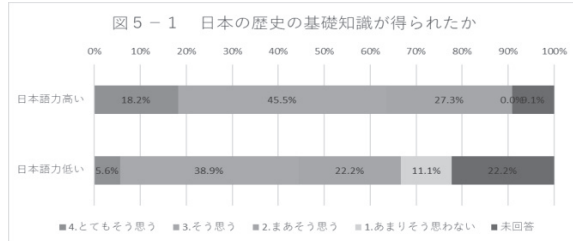


4-4 「日本の歴史」の学習の調査結果

地理学習と同様、「日本事情」の学習者にとっては、日本の歴史の学習経験は殆どなく、初めて触れることとなる。留学生にとって、歴史には日常用語と違い、聞いたことがない言葉が多く、学習の難易度が高いと予測できる。それゆえ、授業には歴史に触れることを前提とし、古代の歴史を中心に時代、人物、重要語句などの基礎的な知識を知ってもらうことに重点をおいた。

今回の学習で歴史の基礎知識が得られたか（図5-1）、という質問に、日本語力が高いグループが4も3も低いグループより高く、合わせると6割強の学習者から基礎知識が得られたとの回答があった。一方、低いグループが4と3の回答が4割強であり、1の回答は11.1%となった。つまり、日本語能力が低いグループは基礎知識が得られたという実感は、高いグループの学習者程には至らなかったということになった。これは地理の学習と同じく、歴史の学習も漢字が多く、聞き慣れない言葉や読み書きが難しいという点で、学習者にとってハードルが高い学習であると考えられる。日本語能力が高い学習者は基礎学力があることで、新しい知識の吸収にプラスの働きとなり、日本語能力の低い学習者は基礎学力が乏しいことから、新しい学習修得度に影響があったということになる。

そして、男女別（図5-①）でみていくと、男子グループが4と3が6割弱で、女子は4割強となり、女子グループの2の回答が3割を占めた。これは男子のほうが歴史学習に前向きな姿勢があると見られ、女子は男子程前向きになれなかったとも解釈できる。

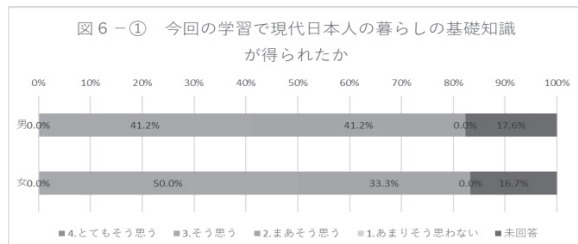
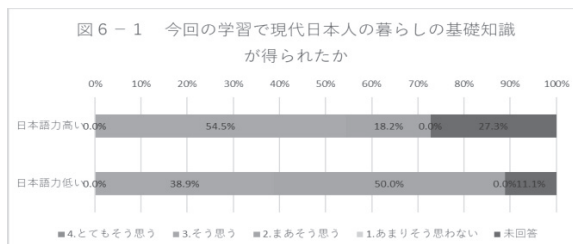


4-5 「現代日本人の暮らし」の学習の調査結果

第5回の授業では現代日本人の暮らしについての学習を取り入れた。受講者のほとんどは日本人の住まいや暮らし方、習慣などのすべてが母国と異なり、日本に住んでいても日本人の暮らし振りを経験したことがない。ここでは学習を通して、語彙力が増すと同時に日本のことを深い理解につなげることを目標とし、日本家屋の特徴から日本人の生活習慣まで紹介した。

問の学習で日本の暮らしに関する基礎知識が得られたか、を見てみよう。（図6-1）（図6-①）

日本語力で見えていくと、高いグループは3が54.5%、2が18.2%で、低いグループは3が38.9%、2が50.0%であった。また男女別でみると、女子グループは3が50.0%で、男子の41.2%より高い数字だった。日本の暮らしにおいて、学習の効果が、高いグループは低いグループより大きく、女子学習者は男子よりやや前向きに学習に取り組む姿勢があったと言っても良いだろう。これは高いグループは日本語の基礎的な語彙能力も高く、低いグループより知識の吸収力、学ぶ力が高いと考えられる。また、暮らしというテーマには女子学習者が男子より関心が高く、学習効果に繋がったと窺える。一方、学習者の実生活の中で日本人の家族と一緒に暮らした経験が乏しいということから更なる高い学習効果の獲得まで到達できなかった一因だと考えられる。



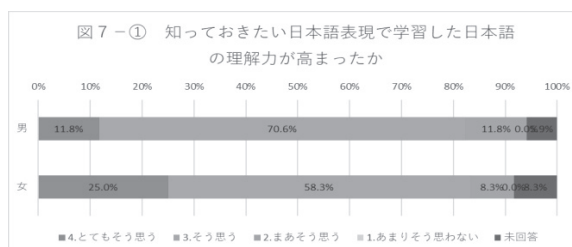
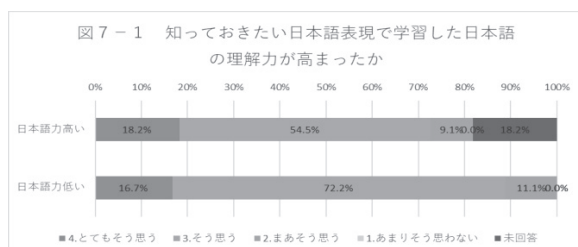
4-6 「知っておきたい日本語表現」の学習の調査結果

第6回の授業では日本語表現の特徴及びそれを産み出した日本特有の自然や社会との関係性なども取り入れながら、基本的な表現を学ぶことを目標とした。学習者の母国の習慣、文化と違ったものもあり、さまざまな場面や人間関係の中で、日本人の心理的な要素を正しく読み取り理解し、円滑な人間関係を築く際に役立ててもらうためである。

問の学習した内容に関する日本語の理解力が高まったか、というアンケートの集計は次のような

ものである。

図7-1、図7-①を見ていくと、4と3の割合は日本語力が高いグループは(72.7%)7割、低いグループは(88.9%)9割近く、男女ともに8割以上であった。さらに、4の学習者の割合から見ていくと、日本語力には差が見られなかったものの、性別では女子(25.0%)が男子(11.8%)より2倍高くなった。これは、殆どの学習者が日本語を理解でき、効果が大いと感じた学習であり、日本社会での生活においても、良い人間関係づくりに必要且つ実践できる実用性が高い知識だと実感したと思われる。また、女子学習者は日本語表現の仕方に対する関心がやや高く理解力にもつながっている。日本語表現においては日常生活によく使われる挨拶を始めとして、日常やビジネスの場など、様々な人間関係においての表現の特徴などについても注視して学びを行った。これは、地理や歴史の学習と違い、身近な生活に実用性が高く、しかも日本語力の高低に影響されにくく易しい内容であるということから、日本語力が低い学習者も高い学習効果を得ることに繋がったと推測ができる。



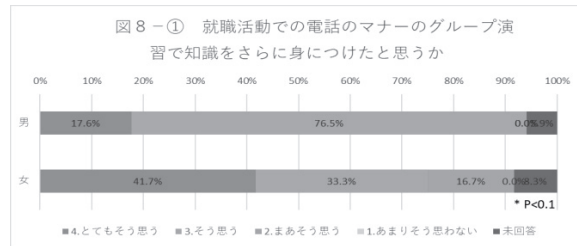
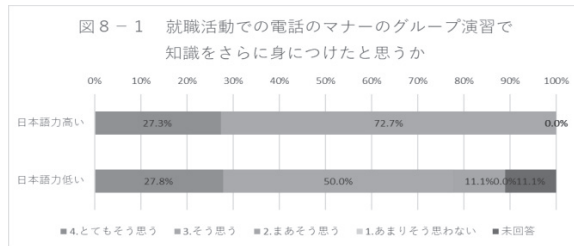
4-7-演習① 「就職活動で必要とする電話のマナー」の学習の調査結果

受講している多数の留学生は日本で就職を希望することもあり、特に短大は2年という短い学習期間で、次年度の就職活動に備え、1年次に関連知識を学ぶ必要があることから、前回の「知っておきたい日本語表現」の学習の応用編として、第7回の一部の授業は、日本の就職活動の知識、マナーを取り入れた。また、実際の場面を想定しながらの就職活動時の電話の受け答えを身につけるため2～3人で1組でグループ演習を行った。

問の就職活動で必要とする電話のマナーのグループ演習を通して、学習した知識をさらに身につけることができたと思うか、という質問のアンケート集計の結果は図8-1、図8-①である。

日本語力から見ると、両グループは4が同じであり、3は高いグループ(72.7%)は低いグループ(50.0%)の1.4倍となった。また、4と3の割合は高いグループは100%という結果となった。そして、男女別から見ると、4は女子グループが41.7%で男子の17.6%の2.3倍となった。また、3が男子(76.5%)は女子(33.3%)の約2倍強となった。以上の結果から分かることは、日本語力においては両グループの学習者はともにグループ演習を通してさらに良い学習効果に繋がったことが分かった。特に日本語力が高いグループは全員高い学習効果を得ることができた。また、女子は就職活動というテーマに対して前向きに取り組み、高い学習効果を得た学習者が多い一方、男子の全体は就職に対して積極的な姿勢が見られ、良い学習効果につながった。これは学習者の約9割は日本に就職することを希望しているため、テーマに関して関心度が高い上、すぐ実践できる学習は

学ぶ意欲を引き出すことができるということを示している。

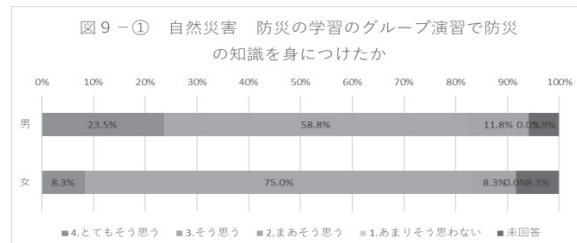
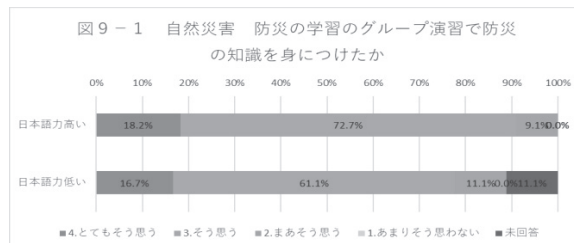


4-7-演習② 「自然災害 防災」の学習の調査結果

日本は災害の多い国とも言われている。日本に暮らしている留学生に災害や防災の知識を知ってもらうことは、安心安全に留学生生活を送るために必要不可欠である。第7回の授業では自然災害や防災を取り入れて、講義の後、1グループ5人程度でグループ演習を行った。

問の防災について考えようというグループ演習を通して、地震や津波が発生する時の対策などを身につけることができたか、というアンケートの結果は次のようになった。

図9-1、9-①から見ると、日本語力の高低においては両グループには大きな開きはなく、4と3で合わせると高いグループは9割、低いグループは8割近くとなった。男女別では男子グループの4が女子より約3倍高いという結果となった。これは防災について日本語力と関係なく学習者にとっては関心の高いテーマであり、演習で対策について自ら主体的に考えることによってさらに学習の効果が定着しやすいと考えられる。また、男子学習者が防災について女子より意識が高いということも見て取れる。



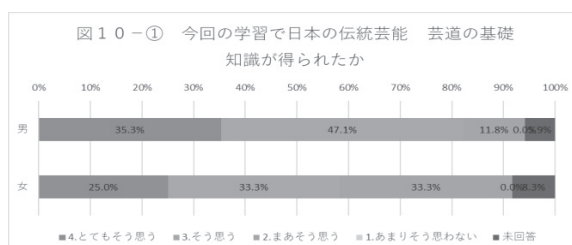
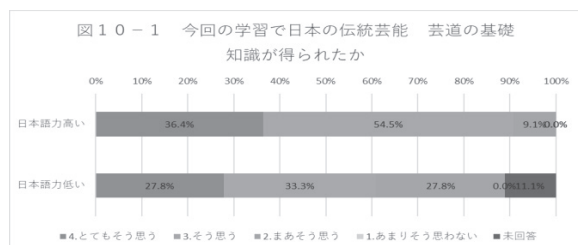
4-8 「日本の伝統芸能 芸道」の学習の調査結果

日本の伝統文化については日本の伝統芸能及び芸道を取り入れた。学習者は数年ほどの日本滞在だけであるため、日本伝統文化に接する機会が少なく深く学ぶチャンスが殆どなかったということが、今回の授業の中で分かった。日本には昔から現在まで伝えられてきた多様な芸能、芸道があり、文化と日本人の精神の融合で生まれた日本人の美意識、道德観、生き様などは深いものがある。伝統文化に触れることは日本人の精神を知ることであり、日本を深く理解するには一助になると期待できる。今後の授業では、一般講義の後、文化体験も取り入れ、更なる理解を深めることに繋げるよう努めたい。

4-8-① 一般講義の学習アンケート調査結果

学習を通して、日本の伝統芸能 芸道の基礎知識が得られたか、について図10-1、図10-①のような結果となった。

日本語力が高いグループと男子学習者が、日本語力が低いグループ、女子学習者より、4と3とも高く、はっきりとした差が見られた。これは日本語能力の高い学習者は漢字力などの基礎力も高く、これを土台にして名称から漢字が多く使われる日本伝統文化の吸収、理解が有利になるのに対し、日本語能力の低い学習者は学習の基礎学力が低いため、新しい学習の吸収を妨げたと分析できる。また、男子学習者は女子学習者より4も3も高く、トータルで男子は8割強、女子は6割弱で明らかな差があった。これは男子学習者のほうが日本伝統文化に対する関心が高く基礎知識を得ることに繋がったということも推測できる。

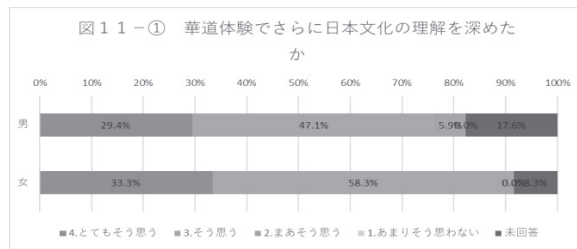
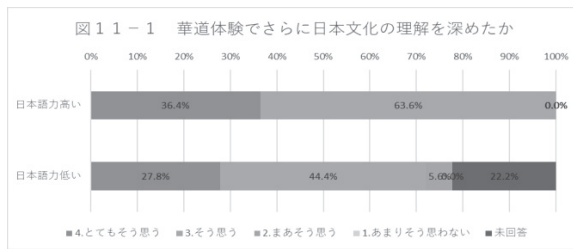


4-8-② 文化体験の学習アンケート調査結果

日本伝統文化について一般講義を行った後、2人から3人一組で華道体験を行った。受講者全員が初めての体験であり、作品づくりに真剣に取り組む様子が見られた。

アンケート調査の結果は次のようになった。

問の華道体験を通して、さらに日本文化の理解を深めたと思うか、という質問に、図11-1、図11-①のような回答であった。日本語力が高いグループは4も3も低いグループより高く、合わせると100.0%となった。また、日本語力が低いグループも7割以上となった。男女別では、女子学習者の4と3が男子より高く、合わせると9割以上となった。そして、男子学習者も7割強という結果となった。これは総合的に見ると、今回の華道体験は学習者にとって日本文化の理解に有意義なものとなっている。この結果から、特に日本語力が高いまたは女子学習者はさらに文化の理解に役に立ったという認識を得たことがわかる。日本語力が高い学習者は日本語力が低い学習者より華道の先生の説明内容だけでなく、華道を実際体験することによって、日本語学習だけではなく日本文化への理解が深まったということである。一方、日本語力の低い学習者は日本語での説明を十分に理解できないことから、日本語力の高いグループのような効果まで至らなかったということである。また、華道に関して女子学習者のほうが男子より興味が高いということも分かった。アンケートでも「今日は生け花をやって、楽しかった。」「おもしろかったよ。」「とても楽しかった。」「今日はいつもおもしろかった、みんなが楽しく勉強していました。」「華道体験授業はたのしかったです。」「もっと日本の文化を学びたいと思います。」と概ね好評価だった。このように、学習者にとっては、華道体験は日本文化を知る良いきっかけになり、歓迎される体験であることが推測できる。

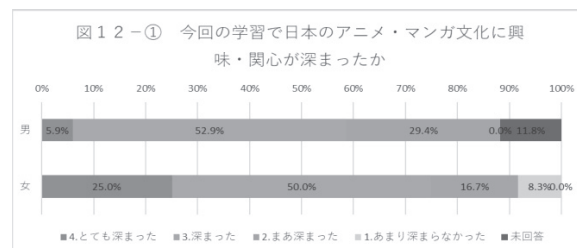
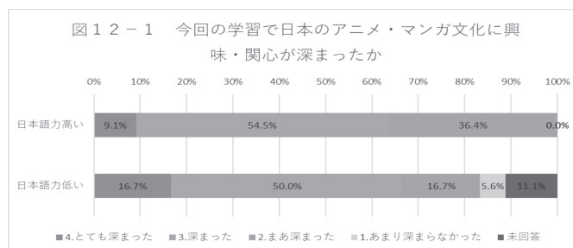


4-9 「現代日本のアニメ・マンガ文化」の学習の調査結果

日本のアニメ・マンガは世界でも広く知られていて、日本が誇るポピュラー・カルチャー文化の一つとも言える。それをきっかけに日本語を学習する外国人学習者も少なくはない⁹。(国際交流基金2018年度調査によると、日本語学習の目的として断トツ1位となっているのは「マンガ・アニメ・JPOP・ファッション等への興味」で全体の66.1%という高い割合になっている。)現代日本の文化の一つとしてアニメ・マンガを取り上げることは意義があると考えられる。授業では日本で一般的に知られているアニメ・マンガをピックアップして紹介し、覚えるより知ってもらい、知識に触れることによって興味を持たせることを重視した。

問の学習を通して、日本のアニメ・マンガ文化に興味・関心が深まったか、という質問に次のような結果となった。

図12-1、図12-1①で示されているように、日本語力の高低にはっきりとした差は見られなかったものの、4は女子が男子より4.2倍高い結果となった。また、1の回答者も現れたことが分かった。これは女子のほうがアニメ・マンガというテーマの学習に意欲、関心度が高く、積極的に知識を理解することで、興味・関心を深めることにプラスの働きがあったと考えられる。また、授業アンケートの感想欄には、ある学習者から「実はマンガが嫌いなので、すみません。」という記述があった。つまり、日本のマンガ・アニメ文化は大多数の学習者にとっては、興味のある文化である一方、テーマ自体に関心を持たない学習者もいるということが読み取れる。そして、このテーマの学習は、日本語能力の基礎知識の必要性が低いということから日本語力の低いグループも良い学習効果が得られることができたということが分かった。



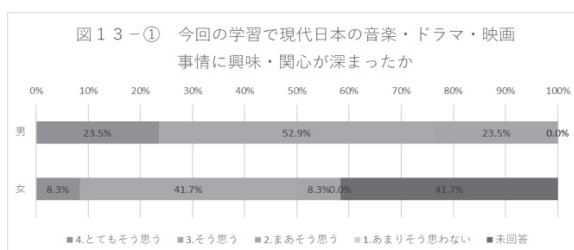
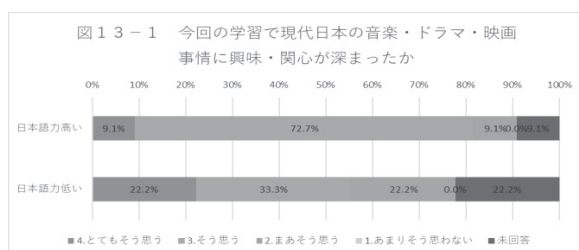
4-10 「現代日本の音楽・ドラマ・映画事情」の学習のアンケート調査結果

前回のテーマと同様に、現代日本について幅広い分野に興味を持たせるため、今回はJ-POP音楽や、海外でも広く知られ影響力のある連続ドラマや映画についても紹介した。すなわち日本のエ

ンターテイメントも知ってもらうことで更なる日本理解に役に立つと考えたからである。

問の学習を通して、現代日本の音楽・ドラマ・映画事情に興味・関心が深まったか、について図13-1、図13-①のような結果となった。

日本語力の低いグループの4の割合（22.2%）は高いグループ（9.1%）より2.4倍高く、逆に高いグループの3は72.7%という高い割合となり低いグループ（33.3%）の2倍以上となった。すなわち、この分野は日本語力の低い学習者に受け入れやすく、触れる事で興味や関心までつながりやすい面があるという興味深い結果を示している。また、高いグループは普段の勉学と同時に日本のエンターテイメントにも関心度が高い傾向があることで、学習を通してさらに興味・関心が深まりやすいとも推測できる。そして、男子は4も3も女子より高く、大きな開きが見られた。現代日本のエンターテイメントにおいて、男子学習者が女子より興味や関心が高いということはこの調査で初めてわかったことであり、大変興味深い。



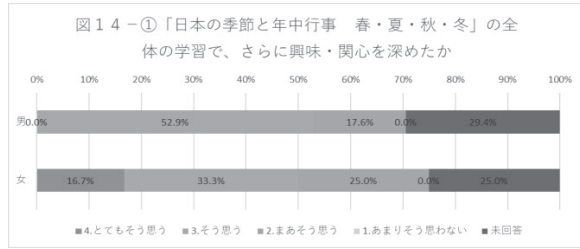
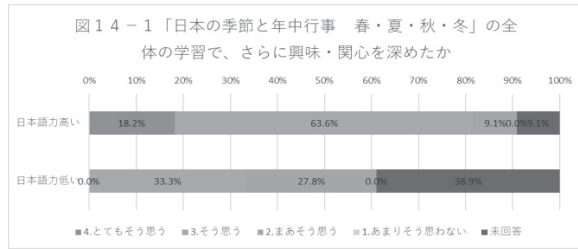
4-11 「日本の季節と年中行事」の学習のアンケート調査結果

「日本事情」の後半授業では、3回に渡って、日本の季節と季節ごとの年中行事についての学習を取り入れた。受講している短大留学生学習者は、日本で暮らしている時間はそれほど長くない、学校やアルバイト以外での日本人との接点が少ないのが現状である。さらに、日本に対する理解が浅く、その上、言葉の壁、考え方、習慣、文化の違いなどの異文化要素が、日本人との円滑なコミュニケーションを図るには、高いハードルとなる。日本社会に深く関わることはできないということで、実際の日本人の生活スタイルもよく知らない受講者が殆どだ。日本人が昔から生活の中で大事にしてきた慣習、文化について学習することで、日本人、日本社会への理解を深めることができると考えられる。

3回に渡って学習した日本の季節と年中行事の授業の全体の学習を通して、この分野に更に興味・関心を深めることができたか、についての回答結果を見ていきたい。

図14-1から見られたように、日本語力が高いグループは4が18.2%、3が63.6%で合わせて81.8%という高い数字となった。それに対して、低いグループは4がなく、3が33.3%で全体の3割程度に留まった。つまり、高いグループは低いグループの約2.5倍という大差が見られた。また、男子グループは4がなく、女子グループは4が16.7%であった。これは日本語能力の高い学習者は理解力や知識を吸収する力も高く、親しみやすい分野の学習に前向きになれる。そして、知識を増やすことによって、更に、興味、関心が深まると考えられる。一方、日本語能力の低い学習者は学習内容を十分理解できていないことで興味、関心が高まりにくいということも見て取れる。また、身

近な暮らしに関する学習内容は、女子学習者のほうが関心が高いということも見て取れる。

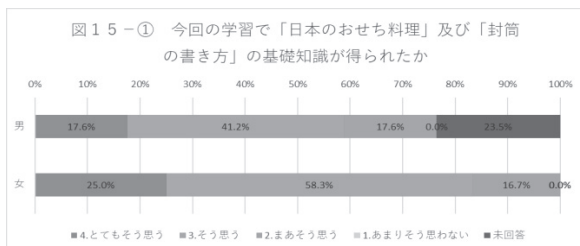
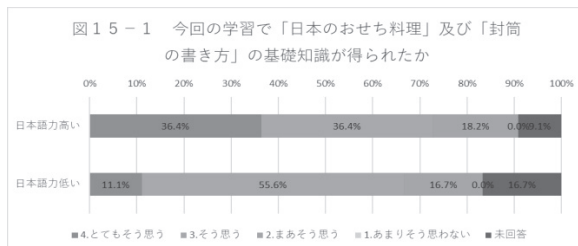


4-12 「日本人のしきたり」の学習の調査結果

日本人のしきたりの授業では、おせち料理や封筒の書き方などを取り入れた。おせち料理は昔からの日本人の知恵が込められた独特な食文化であり、外国人学習者に知ってもらうことで日本理解を更に深められると考えられる。また、筆者は留学生支援の仕事にも携わり、毎年、就職活動などで先方に書類送付する際、殆どの留学生が封筒の書き方が分からなく相談に来るケースが多くあった。したがって留学生の母国と違う日本の封筒の書き方を知ってもらうべきと考え、これを取り入れた。

問の今回の学習で「日本のおせち料理」及び「封筒の書き方」について、基礎知識が得られたか、についての結果を見てみよう。

図15-1、図15-①で示されたように、日本語力が高いグループは4が36.4%、低いグループの11.1%の3倍となった。また、女子学習者が4も3も男子より高く、合わせると83.3%になり男子の58.8%より1.4倍高い結果となった。これは日本語能力の高い学生は日本語の理解力も高く、基礎知識の獲得にはプラスの効果になったと考えても良いだろう。また、女子に関心の高い食文化の学習内容が、効果的な学習につながったと言える。



5. 時事学習の調査結果

「日本事情」の授業では、日本の伝統、現代の様々な文化の学習を行うと同時に、現在日本の最新事情についても触れることを視野に入れた。授業の一部の時間を使って、5回の授業で5つの時事を取り入れた。記事のタイトルは次のようになる。

「恵方巻と食品ロス」

「新しい元号は『令和』」

「新しい時代、始まる」

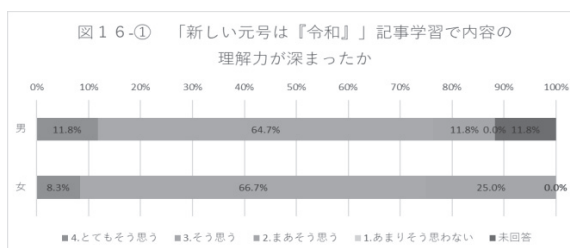
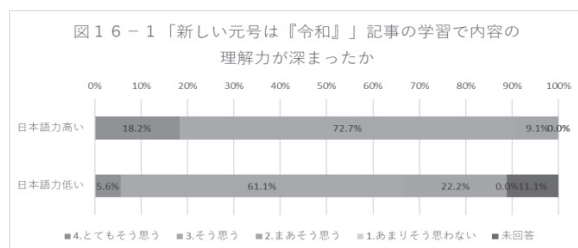
「大阪府にある『百舌鳥・古市古墳群』が世界遺産になる」

「『はやぶさ2』がまたリュウグウという星に下りた」

記事は学習者のレベルに合わせて、日本語能力N2級程度のものを使用し、記事内容を学習する前に、学習者にとって難しい語彙を確認し説明した。内容を学習した後、問題で理解度を確認した。最後は応用問題を行った。それぞれについてアンケート調査を実施した。ここは一つの例を取り上げ、アンケートの結果を見ていきたい。

第9回の授業では、一般講義の後、「新しい元号は『令和』」という記事の学習を行った。

問の「新しい元号は『令和』」記事の学習で内容の理解力が深まったか、というアンケートの集計は図16-1、図16-①で示されたように、学習内容の理解度の違いにおいて男女ではほぼ同じであるものの、日本語力の高低にははっきりとした差が見られた。日本語力が高いグループは4が18.2%で低いグループの5.6%より3倍以上の開きがあった。また、4と3で見ると、日本語力が高いグループは9割であるのに対して、低いグループは6割強であった。これは内容の理解度においては、日本語力が左右するもので、新しい語彙だけでなく、基礎能力が理解の土台になっているため、日本語力が高い学習者のほうが内容の理解度が高いということが予想できる結果となった。



6. まとめと今後の課題

日本の文化、社会について幅広く学習することによって、日本への理解を深め、日本人の行動の様式、習慣、価値観などを知り、日本社会に適応する能力を身につけることを目的とする「日本事情」の授業を、異文化としての学びや学習者主体の学習スタイルを取り入れる工夫をしながら授業を行った。学習者の日本語能力と性別(男女)でテーマごとに沿って、学習効果について検証を試みたところ、一般講義では日本語基礎能力に左右されやすく、漢字や新出語彙などが多く使われるような授業、つまり、日本語能力によって学習の理解度、知識を吸収する能力に影響が出やすい「留学生のために必要な知識」「日本の地理」「日本の歴史」「日本の伝統芸能 芸道」「日本の季節と年中行事」「日本人のしきたり」などにおいて、日本語能力が高い学習者が低い学習者より学習効果が高い傾向が見られた。一方で、日本語基礎能力に影響されにくく、身近な生活に実用性が高い「知っておきたい日本語表現」、また、興味、関心度の高い現代日本のエンターテインメント領域の「現代日本アニメ・マンガ文化」「現代日本の音楽・ドラマ・映画事情」などの学習において、日本語能力の低い学習者でも高い学習効果が得られやすいということが分かった。そして、日本文化、社会などの諸日本事情を、幅広く触れさせることで、各分野の基礎知識を理解するには一定の効果

が得られた。さらに、興味や関心が高まる効果が得られた学習もあったことが見て取れた。

一般講義以外に、グループ演習や体験型授業を取り入れたことで、学習の応用力を身に付けたり、学習者の意欲、興味を大いに引き出すことができることも分かった。「高額療養費制度」のグループ演習では演習の前の一般講義の説明の理解度に日本語能力によって差が出たため、グループ演習にも影響を及ぼした。つまり、日本語能力の高い学習者は高い学習効果が得ることができ、学んだ知識を活かし、具体例の解決策に積極的な取り組みが見られた。「自然災害 防災」「就職活動で必要とする電話のマナー」のグループ演習では、日本語能力と関係なく学習者全体で高い学習効果が得られた。特に、自らとの関係性の高い学習テーマの「就職活動で必要とする電話のマナー」のグループ演習では、全体に高い意欲で取り組むことができるのも見て取れた。これは日本の就職活動は外国人学習者にとって母国と異なる文化であり、大多数の学習者が日本に就職を希望する背景が、この異文化を自分の中に取り入れたいという動機付けに繋がったと考えられる。故に、テーマに関心度が高い上、すぐ応用、実践できるということから意欲を大いに引き出せたと分析できる。そして、日本文化体験として取り入れた「華道体験」の学習では、日本文化の理解に有意義なものとなり、学習者から高評価を得たことから、歓迎される学習スタイルであることが分かった。特に、日本語能力の高い学習者は説明の理解度が高いため、より良い学習効果が得られた。

時事学習においては、記事の学習には日本語の基礎能力が理解の土台になっているため、日本語力が高い学習者のほうが低い学習者より高い学習効果が得られた。

学習効果を学習者の性別（男女）から見ていくと、テーマによって関心の高さ、学習意欲の差が見られ、学習効果まで影響を及ぼすということが分かった。「大学生活 日本での暮らしのルール」「留学生のための必要な知識」といった留学生生活に関するテーマ、また、暮らしや旅行に関連する「日本の地理」「現代日本の暮らし」、人間関係づくりやコミュニケーションと関連するテーマの「知っておきたい日本語表現」、現代日本のエンターテインメントをテーマとする「現代日本のアニメ・マンガ文化」、食文化の学習内容などを取り入れた「日本人のしきたり」、日本文化を体験する「華道体験」では女子学習者のほうが男子より関心が強く学習効果が高いという結果となった。一方、「日本の歴史」「日本の伝統芸能 芸道」「現代日本の音楽・ドラマ・映画事情」の学習、「高額療養費制度」に関するグループ演習は男子学習者が女子より関心があり学習効果が高いということが分かった。

このようなことから、留学生学習者の授業において、日本語力が必要とされる学習内容の学習は、日本語力が低い学習者も効果が得られるような工夫が必要だと言えよう。また、男子と女子学習者の学習内容への関心度も視野に入れ、全体的に学習効果が高まる教授法を考える必要がある。学習効果を最大限にするため、日本語能力が高い学習者の学習成果をキープすると同時に、日本語能力の低い学習者を置き去りにしないように授業方法を考える必要がある。

今回の調査対象はアジア諸国から来た29名という少人数の留学生の学習者であり、本学の短大生に限った結果であった。しかし、少人数とは言え、留学生学習者の学習内容によって学習効果の傾向性が検証できたと言っても良い。以上のような調査結果から、今後「日本事情」の授業では留学

生の日本語能力の差及び性別（男女）によって学習テーマへの関心度の高低などの諸要素を踏まえた上で、効果的な教授法を模索することが喫緊の課題と言える。

【補足】

- 1 授業では以下の書籍を参考にした。

桂島宣弘編（2005）『留学生のための日本事情入門』文理閣.

東京外国語大学（1990）『留学生のための日本史』山川出版社.

水谷修 他 編（1995）『日本事情ハンドブック』大修館書店.

久保田学（2018）『留学生のための就職内定ワークブック』日本能率協会マネジメントセンター.

- 2 授業で取り上げた時事ニュースについて以下のサイトを参考して作成した。

NHK NEWS WEB EASY HP <https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>（2019.4～2019.7閲覧）

「日本語ブックス」通信 HP http://nihongo-online.jp/net/?page_id=256（2019.4～2019.7閲覧）

【参考文献・参考サイト】

足立祐子、池田英喜（2018）「協働学習における授業改善の経緯と教師の役割：共修授業「グローバルコミュニケーション」「日本事情グローバル」の授業実践報告から」『新潟大学高等教育研究』5,pp.17-22.

吹原豊（2011）「アカデミック・ジャパニーズとしての日本事情に関する一考察：2つの大学における実践から」『フェリス学院大学文学部紀要』46,pp.373-392.

久川伸子（2013）「日本の大学における学部留学生向け日本語プログラムの現状と課題—改善のための協働—」『東京経済大学人文自然科学論集』134, pp.41-50.

加納千恵子（2006）「留学生センターにおける日本語教育・研究の現状と課題」『筑波フォーラム』73,pp.77-80.

水谷修 他 編（1995）『日本事情ハンドブック』大修館書店.

内藤寿子（2014）「「日本事情」教材の研究：教材としての着物文化」『駒澤日本文化』8,pp.150-138.

清水順子（2016）「CLIL理論に基づいた「日本事情」の可能性—伝統文化から現代日本を理解する試み—」『北九州市立大学国際論集』14,pp.147-155.

戸田利彦（1992）「大学正規科目としての「日本事情」に取り扱い（Ⅰ）：理念と内容規定のあり方をめぐって」『比治山女子短期大学紀要』26号,pp.41-55.

横山博信（2018）「留学生別科日本語研修課程における日本事情科目指導の在り方—「日本の歴史」テーマ別カリキュラムによる指導実践の考察—」『朝日大学留学生別科紀要』15,pp.3-16.

文部科学省「外国人留学生向けの教育を行う大学別科における教育の実施状況の公表について」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1382457.htm

独立行政法人日本学生支援機構「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」

https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/intl_student_e/2018/index.html

【注記】

- ¹ 独立行政法人日本学生支援機構「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」によると、2018年5月1日現在の日本全国の留学生数は298,980人となっており、一貫して増加傾向にある。また、文部科学省「外国人留学生向けの教育を行う大学別科における教育の実施状況の公表について」によると、外国人留学生向けの大学別科における教育も拡大傾向にある。
- ² 留学生に特化した日本語教育科目を導入している大学例として、筑波大学、静岡大学など挙げられ、多くの高等教育機関では、留学生を対象とする日本語コースが設けられ、日本語教育が行われている。
- ³ 『日本事情ハンドブック』pp.vを参照。
- ⁴ 『日本事情ハンドブック』pp.viを参照。
- ⁵ 戸田利彦（1992）「大学正規科目としての「日本事情」に取り扱い（Ⅰ）：理念と内容規定のあり方をめぐって」『比治山女子短期大学紀要』26号,pp.43.
- ⁶ 本稿のアンケート調査の分析は学習効果の傾向性を重視したもので、故にグループ人数が違う上での比較ということで、割合を重視して分析することにする。
- ⁷ 国際交流基金と日本国際教育支援協会が主催する、主に日本語を母国語としない日本語学習者を対象とし、日本語能力を証明する試験である。日本語能力試験には難易度の高い方からN1、N2、N3、N4、N5の5つのレベルが設けられる。N2級とは、日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる、というレベルである。
- ⁸ 専門教育出版が主催する、日本語を母国語としない日本語学習者の日本語能力を測定する試験で、難易度の高いほうからN1、N2、N3、N4、N5の5つのレベルが設けられる。それぞれの級の難しさは、日本語能力試験のN1～N5に相当する。
- ⁹ 国際交流基金〔2018年度「海外日本語教育機関調査」結果（速報）〕
<https://www.jpf.go.jp/j/about/press/2019/029.html>